カクワカ広島で活動するユース・田中美穂さんに訊く

以下は、2024年7月2日、田中美穂さんにオンラインでインタビューを行った内容を編集部がまとめたものである（文責：事務局）。聴き手は、日本反核法律家協会の田中恭子事務局が務めた。（文中の脚注は編集部による。）

田中美穂（たなか・みほ）さん

1994年生まれ。福岡県北九州市出身。2017年西南学院大学卒業まで九州で過ごし、その後広島の企業に就職。2019年1月にハチドリ舎[1]店主安彦恵里香さんらとともに核政策を知りたい広島若者有権者の会（以下、カクワカ広島）の発足にかかわる。現在はカクワカ広島共同代表の一人として、イベントの開催や国会議員の面会活動などにとりくむほか、2024年4月に発足した「核兵器をなくす日本キャンペーン」[2]の広島コーディネーターも務める。

プロフィール

田中美穂さん

――本日は、よろしくお願いいたします。さっそくですが、田中さんが核兵器の問題に関わろうと思うようになった、そのきっかけについて教えてください。

今、広島に住んで7年になりますが、大学を卒業するまではずっと九州・福岡県で過ごしました。広島の企業に就職したのも全く偶然で、それまで核兵器のことを学ぼうとか、平和のアクションをしようとか考えたことはありませんでした。

ただ、広島に来て2年目になる2018年8月6日、大学時代の友人から川崎哲さんを紹介してもらいました。その友人は、大学院に進んで法律の面から核兵器や安全保障のことを学んでいて、川崎哲さんとも知り合いだったんです。自分の友人が、その前年ノーベル平和賞を受賞したICANの日本の“顔”のような人と知り合いだというので、結構驚いたことを覚えています。

友人は広島で8月6日頃に行われるイベントにあわせて訪れたのですが、私も一緒に参加して、その一つに川崎さんが登壇してお話されました。そこで聴いたのは、たとえばグローバルヒバクシャの話だったり、それまで全く、学校でも社会に出て

インタビュアー田中事務局

1 Social Book Cafe ハチドリ舎の詳細は https://hachidorisha.com/home/ を参照。
2 核兵器をなくす日本キャンペーンの活動については https://nuclearabolitionjpn.com を参照。

からも学んでこなかったようなことを初めて知って、とても新鮮でした。そのイベントの後、友人とともに川崎さんと直接お話しする機会があり、私はたまたま広島で就職した普通の会社員ですが、何か自分にできることはありますか、と尋ねました。やはりイベントに参加して自身感じるものがあったのだと思います。すると、川崎さんは、「いろいろあります」。私が大学時代英語を学んでいたことを話すと、それならば、とICANが定期的に発行するニュースレターの日本語訳を任されました。

それが私にとっての第一歩になりました。自分のスキルを活かして、自分も学びながら、少しでも貢献できるという実感を得られて嬉しかったです。

――その後、カクワカ広島を立ち上げて活動を始められたのですね。カクワカ広島はどのような経緯で生まれたのですか。

川崎哲さんと知り合いになってから、彼が広島にこられるたびに、いろいろな方を紹介してくださいました。ICANのダニエル・ホグスタさんが来広されたときにも食事に呼んでいただいて、そこで、広島で活躍している同世代の人やたくさんの被爆者の方々と初めて出会いました。普段の勤務先では全く出会えないような、新しい世界という感じでしたね。食事しながらいろいろな話をして、同世代の人たちと意気投合して、SNSでのつながりも生まれました。

サーロー節子さんと（写真提供：田中美穂さん）

そのちょうど1週間後に、今度はサーロー節子さんが広島に帰ってこられた折に開かれた講演会に参加して、彼女の「いろいろな場所で証言活動をしていると、『頑張ってください』『核兵器がなくなるよう祈っています』などと声をかけられるが、祈っているだけでは世界は変わらない、あなたたち一人ひとりの具体的な行動が必要です」という趣旨の言葉が胸に突き刺さりました。ニュースレターの翻訳というかたちで、少しずつ関わり始めたところでしたが、もっと具体的に何か行動しないと、世界は変わらない、という思いを強くしました。

その日、1週間前に出会った同世代の人たちがやはり講演を聴きにきていて、帰り道に出会ってまた一緒にご飯を食べにいくことになりました。皆、サーロー節子さんにインスパイアされて、自分たちも何かしたい、という思いに駆られていたところでした。そこに、今のメンバーで発起人でもある安彦恵里香さんも同席されていました。安彦さんは、ずっと「岸田首相に会いたい」ということを考えておられた方なんですが、岸田首相だけでなくて、いろいろな国会議員に会うような活動を、ICANに倣って初めてみたらどうか、というアイディアを出してくれたんです。それが皆の心に刺さって共感を呼び、盛り上がったところで、今すぐ始めよう、ということになりました。

私たちのシンプルな疑問として、日本が核兵器禁止条約に入っていない、それは何故なのかを知りたい、それを尋ねる相手として国会議員に面会してみようということで、それから約1ヵ月後の2019年1月にカクワカ広島を立ち上げた、という流れになります。

――そのパワーと行動力には圧倒されます。カクワカ広島の最近のとりくみについてご紹介いただけますか。

昨年くらいから月１回くらいのペースでイベントを行っています。今年に入って一番大きなイベントは、ICANのメリッサ・パーク事務局長が初めて来日され、広島・長崎を訪れた際の企画でした。パーク事務局長の「変化は一日で起こるものではない」という言葉は、元外交官で核兵器問題・環境問題にずっと携わってこられた方ならではの重みがありましたね。一つひとつ自分のやるべきことを楽しんでいらっしゃるような彼女の雰囲気を、参加者皆で共有できるイベントになったと思います。その他、映画「オッペンハイマー」の公開に合わせて、皆で感想を述べ合うイベント。それに続けて映画に描かれていなかったところを自分たちで調べて、またそれを発表するというイベントも行いました。また、今年３月には、カクワカ広島メンバーでもある高垣慶太さんと瀬戸麻由さんがマーシャル諸島を訪れた[3]機会に、現地と広島とを中継でつなぐイベントも行っています。核の問題をいろいろな側面から考えられるような、一緒に学べるイベントを続けていきたいと思っています。

マーシャル諸島と繋いだイベントにて（写真提供：田中美穂さん）

議員面会（写真提供：田中美穂さん）

議員面会の活動については、会ってくださる議員さんには会いつくしてしまった感じで、新しく面会に応じてくださる議員さんへのアプローチに苦慮しています。そこで今年からは、一度お会いした議員さんにも２度目の面会を依頼し、３人の方とお会いできました。中でも嬉しかったのは、比例中国ブロック選出の平林晃議員に、もっとユースの声を核兵器の議論に届けるようにしてほしい、と要望したところ、その要望を国会の質問の場で、カクワカ広島の名前まで出して伝えてくださったことですね。とりくみ始めて６年目になりますが、議員に面会して要望を届けて終わりではなく、それが国会の議論に運ばれたということに手応えを感じています。

一方、岸田首相はじめ、忙しいなどの理由で応じてくれない議員もまだまだいます。面会でうかがいたい内容を予めメールして電話をするのですが、岸田事務所の方は「質問の内容は、既に本で答えている」「核兵器をなくしたい思いは皆さんと一緒」と言われるんですね。

私たち市民が、どのように後押しすれば日本が変わるのかを考えています。日本政府がアメリカに強く言えないのは、市民の

3　機関誌『反核法律家』№119（2024年夏号）9頁以下の記事「マーシャル諸島を訪れたユース・高垣慶太さんに訊く」参照。

声がまだそこまで強くなっていないことも要因の一つではないでしょうか。日本の市民が核兵器禁止条約に入ってほしいと、もっと強く声を挙げないと政府は動かないだろう、と。まずは市民の声に耳を傾けるのは、岸田さんに限らず、政治家の仕事だと思いますし、市民がこれだけ言っているんだということをアメリカに届けてほしいですね。

国会議員の皆さんも、核兵器禁止条約に非常に詳しいというわけではないので、私たちとの面会が、今の議論の最先端をアップデートしていく作業として積み重ねられればと思いますし、議員面会にはそういう役割もあるのだということを、とりくみ始めてから気づきました。

――昨年のG7広島サミットの折にも画期的なイベントにとりくまれましたね。

G7サミットでは様々な課題が議論されることを意識して、核兵器の問題だけではなくいろいろな問題をつなげたいということで企画した「もうひとつのサミット」というとりくみ[4]を行いました。カクワカ広島を中心に、全国のアクティビストが集まって話し合うことができました。気候変動問題で活動している中村涼夏さんと飯塚里沙さん、福島からは秋元菜々美さん、沖縄から元山仁士郎さん、ジェンダー問題では能條桃子さん、そしてカクワカ広島から高橋悠太さんがパネリストになって、それぞれの立場から、5つのテーマをつなげて考える試みでしたが、何が共通点で、何を伝えていかなければいけないのかを、イシューを超えて話し合うことができたのは、とてもいい機会だったと思っています。また、この1回で関係が終わるのではなく、その

「もうひとつのサミット」実行委員会メンバーと
（写真提供：田中美穂さん）

後も定期的に連絡をとりあい、イベント情報を共有したりしています。核兵器の問題だけでなく、それぞれの知識をどんどんアップデートしていくことができますし、それぞれの問題に関心を持つ人同士がまざりあって、関心を持つ人を倍々に増やしていけるという関係が生まれたことは、本当に良かったなと思います。

5つの問題はそれぞれ別のテーマではありますが、参加したアクティビストが口をそろえて、どんな問題でも「見えないようにされてしまう声」がある、と言っておられたことが印象的でした。核兵器の問題でも、広島・長崎の被爆者については認知されても、海外にもヒバクシャはいるということまでに思い至らなかったり、気候変動でもエネルギーを享受している人が資源をどんどん使っていく一方で享受していない人が大きな影響を受けていくということだったり、見えなくされ、とりこぼされる人がいるのだ、ということを改めて認識し共有できました。

――こういった活動を継続的に展開されてきたカクワカ広島を支える皆さんの原動力・そして強みはなんでしょうか。

私自身のことでいえば、やはり核兵器の

4　参考文献：G7広島サミットを考えるヒロシマ市民の会編『私たちの広島サミット－被爆地から核廃絶を訴える』（2023年10月・日本機関紙出版センター発行）

ことを知れば知るほど、何故この兵器が存在し続けるのか、おかしい、という思いが募っていって。カクワカ広島のメンバーや、以前からずっと広島で活動されてきた人にはそのことがわかるのに、世界の大部分にはそれが届いていない、伝わっていない、ということがすごくもどかしいですし、怒りも覚えます。

けれど私が「これは、おかしい」と思うことは、もっと多くの人と共有できるはずだという確信は持っています。知識やデータを取り入れれば取り入れるほど、核抑止というものがどれだけおかしいか、危ういか、いかに人間が核抑止を盲目的に信じてしまっているか、ということがわかってきて、そのプロセスも楽しいんですよ。「これは、おかしい」を皆と共有したいという思いが私の原動力になっていると思います。

カクワカ広島の強みといえば、多様なメンバーにある、と思っています。いい意味でバラバラだということです。同じ方向を向いていても、それぞれ得意なスキルも、性格も、バックグラウンドも皆バラバラで、しかしイベントを一緒にやるときなどはまとまって力を出す。客観的に見ても面白いグループだと思います。いい意味での緩さというか、しがらみやしっかりした建てつけをもたないところが強みなのかなと思っています。

――今年7月末にはNPT第3回準備会合があり、来年3月には核兵器禁止条約第3回締約国会合も控えています。核兵器のない世界を実現するうえで、今最も重要だと思われることや、また今後の活動で特に注力したいとお考えのことを教えてください。

今とてもやりたいなと思っていることの一つが、世界の核被害者、そしてヒバクシャだけでなく各地でその問題にとりくもうとしている若い人たちとつながりたい、ということです。締約国会合でもグローバルヒバクシャ同士がつながることが、大きなポイントになると思いますが、活動している私たち同士も、もっと国を超えてつながっていかなければいけないのではないか、と思っています。特に私たちは、アジアの人たちとつながりたい。まだ全く足掛かりはないのですが、韓国の被爆者の方や、アクションを広げる若い人たちとつながりたい、と思っています。

――カクワカ広島のこれまでの活動を振り返って、その到達点と今後の課題をどのようにとらえておられますか。

カクワカ広島を立ち上げたばかりの頃は、それこそ名前を聞き返されたりという状況だったのが、今は、少なくとも広島選出の国会議員の皆さんには存在を認知してもらえていますし、メディアでもとりあげられるようになりました。広島で活動している若い世代の団体として認知されてきたことは大事なことだと思っています。

けれども、私たちと同じように核兵器禁止条約に賛成している議員さんには、もっとアピールしてほしいという思いがあります。先のG7広島サミットの際にICANとピースボートが主催した政党討論会に参加したカナダやイタリアの議員は、自らの国が禁止条約に入っていないことに心から怒っていて、広島にいる間中、自撮りしながら「今、ここ広島にいます！」と自分のフォロワーにインスタライブで伝えていくわけです。こういう発信の仕方を、日本の議員さんにもっととりいれてほしいなと思います。今は国会議員でもインスタやX(旧ツイッター）をされる方は多いと思いますが、自己アピールに終始するのでなく、課

題につなげたアピールをしてほしい。そういうことを直接会って話すことで、少しでも伝われば変わっていくのではないか、そのためにはもっと面会の頻度を上げることが課題だなと思います。

また、多くの市民の方々に関心をもってもらうためには、様々な課題をつなげて考えることも重要になってくると思います。その意味で、私たちも核兵器のことだけでなく、いろいろな問題にアンテナを張らなければいけないと考えています。日本が核兵器禁止条約に入ってほしいということが最初の入り口でなくてもいいわけです。福祉でも介護でも保育でも、もっと身近なところから政治と生活をつなげていくことで、グローバルな問題にも目が向くようになるのではないか。私たちも自分の関わっていることだけで満足しないで、様々な課題にとりくんでいる人たちとコラボしていくなど、私たちからも間口を広げていくことも課題の一つですね。

――最後にもっとも訴えたいことをお話しください。

今年４月に発足した「核兵器をなくす日本キャンペーン」の広島コーディネーターになり、広島でのイベント開催に関わったりしています。この日本キャンペーンから核兵器禁止条約の素晴らしさや、何故この条約を「推し」ているのか、そのことをもっとデザインや言葉で伝えていきたいと思っています。ぜひご注目ください。

――本日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、有難うございました。